郷土を知るための手引き

昭和５５年７月

福生市教育委員会社会教育課

福生市の成り立ちと人びとの歩み

発展のめざましい福生市の基礎となつている自然風土・文化・社会環境は、遠い昔から今日までの多くの人びとによつて築かれたものです。

私たちは、なお豊かな市民生活と市民文化を築くために、自然と人間の関わりに深い理解と愛情をもつことが大切です。

1　福生の成り立ちと歴史を学ぼう

福生市は、多摩川によつて形成された武蔵野台地の段丘上に位置します。地質は古多摩川の氾濫原に堆積した段丘礫層を主体として、この上を富士山の火山灰から成り立つ立川ローム層が覆つています。3万年前から1万年前に堆積したものです。市内で見られるものは、2万年前から1万年前のものです。立川ローム層の下には、古多摩川によつて運ばれた立川礫層が堆積しています。

参考図書

「福生市の地質」市教委　1979

「東京の自然史」貝塚爽平　紀伊国屋新書　1964

「東京都地盤地質図（三多摩地区）」東京都　1976

「日曜の地学＜東京の地質をめぐつて＞」大森昌衛　築地書館　1978

「鉱物採集の旅＜関東地方とその周辺＞」桜井欽一　他　築地書館　1978

「改訂地学ハンドブック」藤田至則　他　築地書館　1978

「日本列島」湊正雄　他　岩波書店　1976

「目で見る日本列島のおいたち」湊正雄　築地書館　1973

「日本列島の歴史」　湊正雄　東海大学出版会

「日本の第４系」湊正雄　築地書館　１９７４
「日本の地震」鈴木尉元　築地書館　１９７５
「日本に象がいたころ」亀井節夫　岩波書店　１９６７
「地学事典」平凡社　１９７０
「地球の歴史」井尻正二　他　岩波新書　１９６５
「化石がかたる地球の歴史シリーズ」千代田書房
「化石」井尻正二　岩波書店　１９６８
「化石学習図鑑」井尻正二　他　東洋図書　１９５７
「楽しい化石の採集」井尻正二　他　千代田書房　１９７６
「原色化石図鑑」益富寿之助　他　保育社　１９６６
「恐竜の全盛時代」井尻正二　他　千代田書房　１９７６
「恐竜博物館」小畠郁生　光文社
「岩石」舟橋三男　東海大学出版会
「地球の歴史」山下昇　東海大学出版会
「氷河時代の世界」湊正雄　築地書館　１９７０
「地層と化石」大森昌衛　東海大学出版会　１９７７

先土器時代の文化をさぐろう

日本における先土器時代の文化は昭和２１年（１９５６）に群馬県岩宿遺跡の発見が契機となつて研究されるようになりました。

武蔵野地方では第４紀洪積世最末期（約３万年前～１万年前）の関東ローム層（立川ローム層堆積期）の中から先土期時代の遺跡が発見されています。発見される遺物は、石器礫、木岩などです。ローム層は、酸性度が強く有機物を溶かしてしまうため、他の遺物は発見されません。

縄文時代の文化をさぐろう

約１万年間の長期にわたつて、日本全国で栄えた新石器時代の文化です。狩猟や採集の経済が生活の基本で、文化の中心は東日本でした。食物は、動物や植物、魚、貝類などであつたようです。表面に縄目の文様をもつた土器が生活上、重要な位置を占めており、時代の名称になつています。

縄文時代は、発展過程にしたがい早期、前期、中期、後期、晩期の五つの時期に区分されます。

弥生時代の文化をさぐろう

弥生時代は、食糧を採集する経済から栽培する生産経済に変化し、鉄や青銅を用いる生活にかわつています。紀元前２００年頃から紀元後３００年頃までの５００年間の文化で、大陸文化の影響を強くうけています。

弥生文化は西日本で発達し、東日本へは山の道を通つて伝えられたと言われます。住居は竪穴式ですが、縄文時代の集落とは異つた構成をもつた集落が出現し、小高い丘陵地や台地上に立地します。

参考図書

「福生市の遺跡」市教委　１９７８

「福生市動尊遺跡発掘調査報告書」市教委　１９７７

「福生市長沢遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」市教委

「福生町誌」町誌編さん委員会　１９６５

「福生の歴史（多摩の歴史４）」武蔵野郷土史刊行会　１９７０

「東京都遺跡地図」都教委　１９７４

「東京都遺跡目録」都教委　１９６５

「東京都埋蔵文化財白書 '77」都教委　1977
「わが町の歴史　八王子」村上直　他　　文一総合出版　1980
「武蔵野むかしむかし」朝日新聞社　1971
「石器時代の日本」芹沢長介　築地書館　1979
「石神井川の無土器文化遺跡」保谷市史編さん室　1980
「考古学入門」柴田勝彦　偕成社
「日本のあけぼの」佐野大和　小峯書店　1967
「岩宿の発見」相沢忠洋　筑摩書房　1977
「日本人のルーツ」須知徳平　三省堂　1978
「大地に埋もれた歴史」甘粕建　新日本出版社　1974
「人間むかしむかし」金平正　ポプラ社　1969
「石器と土器のはなし」藤森栄一　学生社　1969
「縄文時代の人びと」江坂輝弥　ほるぷ出版　1976
「縄文人の知恵にいどむ」楠本政助　筑摩書房　1976
「縄文・弥生時代の日本人」岡本明郎　岩崎書房　1973
「古代史発掘・最古の狩人たち―旧石器時代―」講談社　1974
「古代史発掘・縄文土器と貝塚―縄文時代Ⅰ―講談社　1974
「古代史発掘・土偶芸術と信仰―縄文時代Ⅱ―」講談社　1974
「古代史発掘・稲作の始まり―弥生時代Ⅰ―」講談社　1974
「古代史発掘・大陸文化と青銅器―弥生時代Ⅱ―」講談社　1974
「日本の考古学」河出書房　1966
「日本農耕文化の生成」日本考古学協会編　東京堂　1961
「古代史発掘・古墳と国家の成り立ち―古墳時代Ⅰ―」講談社　1974
「古代史発掘・埴輪と石の造形―古墳時代Ⅱ―」講談社　1974

「古代史発掘・埋れた宮殿と寺―歴史時代Ⅰ―」講談社　１９７４

「古代史発掘・都とむらの暮し―歴史時代Ⅱ―」講談社　１９７４

「日本原始美術」講談社　１９６５

古墳時代・古代の文化をさぐろう

３世紀後半から４世紀初頭頃、西日本に巨大な古墳が出現し、５世紀には南関東に古墳があらわれます。６世紀前半には、武蔵国という地方国家が形成されます。

奈良時代の始まる前までを古墳時代とよびます。

次の奈良時代、中央政府は律令によつて、全国を直接支配する体制を作り上げ地方の支配の拠点として各国に国府を置き、精神的な支えとして国分寺を造立します。

武士社会のきびしさを知ろう

武蔵国では、奈良時代以降、牧場や荘園が置かれ、管理にあたつていた別当や荘司は平安時代以降、除々に力を持ち武士団をかかえた豪族となつて行きます。やがて、武士中心の社会となる鎌倉時代へと移りますが、武家社会の形成に活躍したのが武蔵国の武士団です。

平安末期から続く戦乱は、武士達に宗教的な信仰心を芽生えさせたのでしようか、死者を弔う供養塔である板碑が武蔵国にはたくさんみられます。

文字に記された福生郷をたどろう

戦国代名北条氏は、１４世紀初頭に伊豆の韮山から発展し、相模国小田原を本拠地として、三代氏康の時に武蔵国を支配します。市内に、戦国時代に

多摩地域を支配した八王子城主北条氏照が発した文書が二通のこされていますが、この文書は、戦国の乱世の中で村人の生活の安全を守り、領地の支配をしつかりとするために出されたものです。現在の福生市にあたる地域は〝福生郷〟と呼ばれています。

参考図書

「福生町誌」福生町誌編さん委員会　１９６５

「福生の歴史（多摩の歴史４）」武蔵野郷土史刊行会　１９７０

「福生の板碑」市教委　１９６９

「多摩の五千年，市民の歴史発掘」色川大吉編　平凡社　１９７０

「東京百年史第一巻」東京都

「武蔵野むかしむかし」朝日新聞社　１９７１

「武蔵の古社・歴史と風土」　沼勇　有峰書店　１９７２

「多摩の歴史」（1.2.3.4.5.6）武蔵野郷土史刊行会

「あるく武蔵野」横田泰一　新声社　１９７５

「青梅市の板碑」青梅市教委　１９８０

「多摩歴史散歩」佐藤孝太郎　有峰書店　１９７９

「多摩の名刹をめぐる」秋川高校図書部　１９７９

農民のくらしについて考えよう

江戸時代は、封建的身分制度の確立した時代です。農民は、田、畑を耕作して生計を立てていますが、不足する労働力は、村全体で補いあつています。藁葺きの田字形（六畳間が四つ）の家に住み、着物は木綿でできたものを着用し、朝一番鶏が刻を告げる頃起床して畑仕事に出かけ、夕食後は夜なべ仕

事にむしろを編んだりする、大変労働のきつい一日を過していました。

参考図書

「福生町誌」福生町誌編さん委員会　１９６５

「福生の歴史（多摩の歴史４）」武蔵野郷土史刊行会　１９７０

「福生村誌稿・熊川村誌稿」市教委　１９７６

「横田穂之助日記」市教委　１９７０

「福生市文書目録１」市教委　１９７０

「熊川の歴史・鍋ケ谷戸を中心として見たる」森田潤三　１９７６

「神明社・付　周辺の遺跡」森田潤三　神明社奉賛会　１９７２

「福生における千人隊・付　千人隊論考」森田潤三　１９７２

「福生院と福生郷・付　熊川学舎」森田潤三

「武州拝島領熊川村の検地帳について」井沢六男

「熊川村検地貢租関係史料集」市公民館　福生古文書研究会　１９７９

「多摩の歴史」（1.2.3.4.5.6）武蔵野郷土史刊行会

「多摩の五千年・市民の歴史発掘」色川大吉編　平凡社　１９７０

「多摩の歴史散歩」色川大吉編　朝日新聞社　１９７５

「江戸武蔵野の今昔」窪田明治　雄山閣出版　１９７３

「東京百年史・第一巻」東京都

「武蔵野むかしむかし」朝日新聞社　１９７１

「新編武蔵風土記稿」雄山閣

「武蔵野歴史地理」高橋源一郎　有峰書店　１９７２

「武蔵名勝図会」慶友社　１９７５

「東京五百年」東京都　１９５６

「多摩の蘭学」田辺栄吉　１９７９
「多摩地方史料総覧」富永春芳　１９７９
「多摩歴史散歩」佐藤孝太郎　有峰書店　１９７９
「多摩の算額」佐藤健一　研成社　１９８０
「多摩の人物史」武蔵野郷土史刊行会
「西多摩郷土夜話」鈴木哲　１９８０
「講座　玉川上水」（羽村町史史料集第５集）羽村町教委　１９８０
「天明一揆史料」（羽村町史史料集第６集）羽村町教委　１９８０
「田安領宝暦箱訴事件」青梅市教委　１９７８

福生の近代化を確かめよう

明治時代、福生市は福生村と熊川村から成る畑作や養蚕を中心とした農業地域でした。明治２２年に両村で共同事務を行う組合役場を設けます。鉄道やバスなどの交通が整備され、昭和１５年に両村が合併されて町制が施行されました。その頃から都市化が進み、農村から都市へと大きく変わつて行きました。そして、昭和４５年に市制を施行し、福生市が誕生します。

参考図書

「福生町誌」福生町誌編さん委員会　１９６５
「福生の歴史（多摩の歴史４）」武蔵野郷土史刊行会
「福生村誌稿・熊川村誌稿」市教委　１９７６
「記念文集・小学校入学五十周年」福生尋常高等小学校大正１３年入学生記念文集編集委員会
「福生第一小学校創立９０周年記念誌」１９６４
「福生第一小学校創立１００周年記念誌」１９７３

「福生第二小学校創立９０周年記念誌」１９７６

「福生第二小学校創立１００周年記念誌」１９７４

「福生百年小史」福生市文化財調査会　１９６９

「福生ひろい話」森田潤三　１９６８

「福生市志茂二町内会３０周年記念誌」福生市志茂二町内会　１９７７

「福生市鍋ケ谷戸第二町会誌」鍋ケ谷戸第二町会　１９７６

「ふつさつ子第1.2.3.4.5集」山崎茂男　武蔵書房

「教育者橋本兵五郎」橋本婦美子　１９８０

「市町村概観」東京府　１９３８

「東京都市町村沿革概要」１９５９

「東京都市町村概況」１９６６

「東京府市区町村便覧」１９４４

「東京都区市町村沿革概要」１９７６

「東京百年史Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ」東京都

「目でみる東京百年」東京都　１９６８

「東京港史」東京都　１９７２

「東京大空襲戦災誌第1.2.3.4.5巻」１９７３～１９７４

「東京都財政史　上・中・下巻」東京都　１９６９～１９７０

「養育院百年史」東京都養育院　１９７４

「明治期三多摩市町村行政制度の沿革」木崎保雄　１９７９

「水道問題と三多摩編入」（都市紀用１５）東京都編

「激論・困民党と自由民権」鶴巻孝雄　１９８０

「小平に残る御門訴事件関係資料集」小平市教委　１９８０

「福生市勢統計」福生市役所

「西多摩統計」「都市統計」

2　福生の民俗とくらしを学ぼう

武蔵野台地の畑作の村として人々は生活を営み、地域文化を創造してきました。村の社会形態、年中行事、人生儀礼などの民俗により濃くのこされています。農作業などの忙しい時には、村中の家々が助け合い、労働力を補います。また、醤油なども共同の道具で作りました。村の中には、４０戸くらいの家が集まつて〃ニワバ〃と呼ぶ地域的な集団を構成し、農作業や日々の生活を助け合いました。

行事と農作業をかえりみよう

福生市は、古くから農業を中心としてその歴史をつくり上げてきました。それが戦前の旧陸軍飛行場の建設、戦後の米軍横田基地の拡張を通じて、大きくその方向を転換することになります。かつての雑木林は飛行場に変わり畑や田んぼは基地関係の施設や市街地に変わつて行きました。そうした変化の中で、私たちの祖先が創り上げてきた様々な民俗行事、慣習が少しづつ消えて行こうとしています。

手づくりの伝統を学ぼう

日常生活に用いる用具を民具と呼びます。村の人々は、古くは民具は自分で作つて用いていましたが、身近にある材料を用いて村人の注文を受けて専門に作る職人や農業の副業に作る人があらわれています。

民具は、日常生活に欠くことのできない必需品であり、生活に密着した道具ですので、その形態は長い生活の営みの中で洗練され、無駄のない合理的な使いやすいように作られています。

参考図書

「福生市の民俗―年中行事―」市教委　１９７４

「福生市の民俗―人生儀礼・民家―」市教委　１９７６

「福生市の民俗―生業・諸職―」市教委　１９８０

「福生市の屋敷神」秋山節子　１９７７

「福生町誌」福生町誌編さん委員会　１９６５

「序章のフォークロア」木村龍生　１９８０

「東京都民俗地図」都教委　１９８０

「東京都民俗資料緊急調査報告」都教委　１９７３

「武蔵野の民話と伝説」原田重久　有峰書店　１９７４

「東京の古建築」東京都　１９７６

「三多摩の旅」宮岡睦美　１９７９

「多摩の暮らしと食べ物」生活文化研究所　１９７９

「関東地方のおはやしゆらい」立川観光協会　１９７９

「多摩の地名」武蔵野郷土史刊行会　１９７９

「多摩駅名の由来」武蔵野郷土史刊行会　１９７９

「多摩のかたりべ」井上正吉　１９８０

「多摩川と生活―魚と伝統漁法―」立川市教委　１９８０

「多摩の方言と随想」平井英次　武蔵書房　１９７９

「東京都蚕糸業史」都蚕糸業史編さん委員会　１９７７

「秋川市蚕糸業史」秋川市教委　１９８０

「原始漁法の民俗」最上孝敬　岩崎美術社　１９６８

「武蔵野の石仏」多摩石仏の会編　武蔵書房　１９７２

「武蔵野の石仏」加藤薫　保育社　１９６７

「日本の石仏」佐藤宗太郎　鹿島出版会　１９７０

3　多摩川の自然を学ぼう

都市化による自然の破壊が問題となつていますが、多摩川には今も様々な生物たちが生息しています。水中には魚類、底生生物、藻類などが、河原には植物、昆中類、鳥類などがいます。これらの生物たちは、それぞれどのような場所でどのような生活をしているのでしようか。また、他の生物や環境ととのようなつながりを持つているのでしようか。さあ、生き物たちの様子をじつくり観察してみましよう。

多摩川の自然を守ろう

今日の多摩川は昔とくらべるとたいへんかわつてきました。そこに住む生物たちの中には数が減つたり、まつたくいなくなつたものもあれば、反対に増えたものもあります。この生物たちの生活について改めて考えてみましよう。

林の生きもの

福生市内の林の代表樹木であるコナラやクヌギなどの中には、ときおり特別な液（樹液）を出すものがあり、その液をもとめて色々な昆虫が集まつてきます。

落葉の上をよく見ると、ネズミの死がいにオサムシやシデムシが集まつていたり、ヒキガエルがコミスジにとびかかろうとしている瞬間に出会うこともあります。

参考図書

「多摩川沿域の樹木・竹類」市教委　１９７５

「市街東側地域の樹木・竹類」市教委　１９７９

「東京都現存植生図・解説書」東京都　１９７５

「東京都産鳥類目録」東京都　１９７５

「東京の自然史」貝塚爽平　紀井国屋新書　１９６４

「多摩川の鳥（写真集））田村栄　誠文堂新光社　１９６１

「多摩川の自然を守る」横山理子　岩波新書　１９７３

「多摩川の野鳥」津戸英守　１９７９

「多摩川写真集」小山秀司　１９８０

「多摩川７５」とうきゆう環境浄化財団　１９７５

「多摩川流域自然環境保全調査報告書」日本ナショナルトラスト　１９７３

「府中市自然調査報告書第４次（多摩川）」府中市教委　１９７３

「都市の自然史」品田穣　中公新書　１９７４

「都市が滅ぼした川（多摩川の自然史）」加藤迪　中公新書　１９７３

「多摩川流域自然環境調査報告書第３次（多摩川水系の魚類について）」
とうきゆう環境浄化財団　１９７８

「水辺の鳥」小林桂助　保育社　１９７３

「学習鳥類図鑑」宇野恒久　保育社　１９６５

「日本の野鳥」清棲幸保　山と溪谷社　１９７０

「原色魚類検索図鑑」北隆館　１９６３

「野鳥観察の手びき」樋口・松田　東洋館出版社　１９７９

「自然保護ハンドブック」地人書館　１９７５

「多摩川と生活―魚と伝統漁法―」立川市教委　１９８０

「河川の生物観察ハンドブック—河川の生態学入門—」川名国男　東洋館出版社　1976
「河川の生態学」水野信彦　築地書館　1973
「水生昆虫」津田松苗　保育社　1973
「原色日本淡水魚類図鑑」宮地伝三郎　保育社　1970
「人里の植物Ⅰ・Ⅱ」長田武正　保育社　1975
「水辺の植物」堀田満　保育社　1973
「日本帰化植物図鑑」長田武正　北隆館　1972
「水草の研究と観察」大滝末男　ニューサイエンス社　1974
「植物生態野外観察の方法」沼田真編　築地書館　1972
「環境汚染と指標植物」菱田宏　共立出版　1974
「公害と東京都」東京都公害研究所　1971
「野外観察ハンドブック・山野の鳥」日本野鳥の会　1972
「野外観察ハンドブック・水辺の鳥」日本野鳥の会　1976
「野外観察の手びき」柴田敏隆　東洋館出版社　1979
「動物生態野外観察の方法」水野寿彦　築地書館　1975
「自然観察学入門」自然保護協会　1974
「原色日本哺乳類図鑑」横山光夫　保育社　1961
「原色昆虫百科図鑑」古川晴男　集英社
「昆虫の図鑑」古川晴男　小学館　1971
「原色日本蝶類大図鑑」横山光夫　保育社　1961
「原色日本蜘蛛類大図鑑」八木沼健夫　保育社　1958